

## 日本の農村から未来を想像する

内山 節 立教大学大学院教授

ご紹介いただきました内山です。

本日は「日本の農村から未来を想像する」というテーマをいただいているわけですが、今、日本の農村を軸にして、実にいろいろなことが起きているという気がします。

私が1年の半分ほどを過ごしている群馬県の上野村は、農村というよりも山村といったほうがいいような、水田をもたない村です。人口は約1400人ですが、そのうち約250人は都市部から移住してきた人たちです。いずれは村の半分ぐらいの人口が都市出身者によって占められていくだろうと予測しています。

したがって、村の雰囲気もずいぶん変わってきています。たとえば、30代、40代の親たちは、一度は進学や就職で都会に出たことのある人たちが多いのですが、その親たちは自分の子どもたちに「村の暮らしはいいよ」と教えるような育て方をしています。その子どもたちが、親の言うとおり、将来、村に定住するかどうかわかりませんが、やはり村の暮らしを意識した成長をしていくだろうと思います。

実は、村の暮らしというのは、村だけの暮らしではありません。最近では農村世界と都市世界をつなぎながら一体的に暮らすことを希望する人たちが増えているのです。ですから、人口はわずか1400人ですが、この村を支えてくれている人たちが、すでに相当数、都市部にいるわけです。

先日も、あるシンポジウムが村で行われたのですが、参加者は村の人たちより、東京その他の都市部から来た人たちのほうが、はるかに多かったです。その人たちは、たんに村に来たというより、村のいろいろなことに協力しながら、そこを自分の村と考える。普段の生活は都市部で行いながら、自分の暮らしの中に農村的世界を取り入れていく、という人が多くなっています。

そういう人たちは、同時に、村のために、いろいろな知恵を出してくれています。たとえば、上野村には木工に関する産業があります。年商2億円ぐらいの産業ですが、大きな家具から小さな木工製品に至るまで、村に住んでいる木工作家に対して都市部のデザイナーのタマゴや流通関係の人たちが、いろいろな形で協力してくれています。

たとえば、上野村の家具を海外輸出できないか、という話をもってきてくれる人たちもいます。その人たちは別に輸出で商売をしようと思っっているわけではありません。上野村の木工産業を考えた場合、国内市場だけ考えていても、

あまり発展の余地がない。家具は、1回買えば、2回も3回も買い替えるものではない。買っせんし、そもそも、一度、買ったたら、2代、3代と使えるような家具づくりをめざしていますから、将来の日本の人口減少を考えた場合、海外に目を向けたほうがいいということ。海外輸出を視野に入れていくわけです。そういう形で都市部の人たちと上野村の人たちが一緒になって考える、新しい村づくりが始まっています。

そうした農村のあり方を長年、見ているうちに、私もいろいろなことがわかってきました。たとえば、私たちが「自分の生きている世界」という言葉を使った場合、農村では、その世界には二つの意味が含まれています。その一つは、秩序整然とした世界、私たちが普通に暮らしている世界です。ところが、もう一つの世界があるのです。

それは何かというと、自分たちが生きていくうえで、すべての要素が一体的に含まれた世界ということです。そこには、家族もあるし、地域もあるし、自然もあるし、さらには地域をつくってきた文化もあるし、農村的な世界では特に信仰もあります。そういうものが一体的に詰まっている世界、それが、実は、もう一つの「自分の生きている世界」なのです。

ところが、歴史的には、近代以降、そういう一体的世界をさまざまな要素に分解するようになりました。たとえば、経済という形で分解をして、経済発展だけを考える。あるいは、地域づくりということ、それだけが他の要素から分離されてしまう。さらに、信仰となると、信仰は個人の問題です、という形で分離されていく。そのように、近代とは、本来、一体的であった世界をバラバラの要素に分解する歴史でもあった、と言えると思います。

しかし、私たちが生きている世界には、バラバラに分解できないものがあります。たとえば、地域での暮らしと経済は一体的なものだし、地域での暮らしと信仰も一体的なものです。そのように、すべてが切り離せないものとして一体的に存在していたのが近代以前の農村社会です。

そういう一体的世界を、経済とか文化とか信仰とか、さまざまな要素に分解し、バラバラに捉えていくうちに、全体が見えなくなってしまうのが近代という時代であったような気がします。ですから、今、日本の農村で行われていることは、それをもういっぺん統合した世界に再創造したい、ということでもあると思います。

先日、私の村でも秋祭りが行われました。その秋祭りは、一つの信仰といえど信仰ですが、強い信仰ではなく、地域社会をなんとなく結んでいる信仰とも言ったほうがいいようなものです。お神楽や獅子舞などが奉納されていますが、それも地域社会と切り離せない独自の文化です。

そして、そこに、今年もそうでしたが、なんの宣伝もしていないのに都市部

の人たちが、結構、たくさん来ていました。その都市部の人たちは、遊びに来ているというよりも、都市部にはない、農村的で開放的な空間を楽しんでいるという感じでした。

そういう時代ですから、たとえば経済についての考え方もずいぶん変わってきています。今、世間で言われている言葉で言えば、それはソーシャル・ビジネスであったり、コミュニティ・ビジネスであったりするわけですが、地域の共同体と結びつきを強くしていくようなビジネスが盛んになってきています。通常のビジネスでは利益の最大化が目的になるわけですが、利益の最大化ではなく、共に生きる社会をつくっていくために、どんな経済の形が望ましいのか。それがソーシャル・ビジネス、コミュニティ・ビジネスという形をとっているという気がします。

では、人々は、今、農村に何を求めているのだろうかと考えてみますと、私が子どもだったころと今とでは、農村や農業に対する考え方が、ずいぶん変わってきていることを実感します。

私は東京の世田谷区の生まれですが、小学校高学年のころ、将来、大学の農学部に行って、農業をやりたいという希望をもっていました。実際には、大学の農学部に行ったら農業などできないのですけれども、当時は、まだ子どもですし、うちは農家でもありませんでしたから、現実を知らなかったわけで、子ども心に、将来、農業をやるには大学の農学部に行くのが、いちばんいいのではないかと思っていたわけです。

ところが、ある日、学校の担任の先生が私の家を訪ねてきました。母親が対応したのですが、担任の先生は、なんのために来たかという、「内山君は勉強がよくできる。そういう人が、将来、農業をやりたいと考えているらしい。これは大変よくないことです。そういう考えを思いとどまらせるように」と、親を説得しに来たというのです。母親は笑って取り合わなかったのですが、当時は、農業をするとか農村で暮らすということ、そういう目で見ていたということでした。

しかし、今は、特に若い人たちにとって、農業をするとか農村に暮らすということは憧れに近いものになってきています。農村にこそ、近代になって私たちが失ったものがある、という気持ちを抱く人が非常に多くなってきたという気がします。

大学などで若い人たちと話していると、特にそれを感じます。農村で暮らしてみたいとか、農業をしてみたいとか、将来、本当に、そうするかどうかは別として、そういう選択肢もあると思っっている学生が少なくとも過半数はいるという感じがします。実際、あるとき学生にレポートを出してもらったら、80パーセントぐらいの人が、将来、そういうことを検討してみたい、という希望を

もっていました。

そこで、それは何かということなのですが、先ほど言ったように、私たちは、今、バラバラに分解されたような世界で生きている。そして、生きていくためには、まずお金を得なければならぬ。経済を中心とした世界で生きていかなければならない。

しかし、その経済を中心とした世界は弱肉強食の世界で、人々が共に生きるような世界ではない。地域とも関係がない。簡単に言えば、自分だけお金を得るための経済であって、頑張れば頑張るほど地域から離れていく生き方をしなければいけないし、ときには自分の家族さえもバラバラにしてしまいかねない。

そういう現実を見て、もう一度、そうではない社会、人々が共に生きる社会、共に生きる経済、そういうものを回復したいという気持ち若くは人々の中に広がっているのではないか。少なくとも、その一つのヒント、あるいは可能性が農村世界にあるのではないかと感じている人々が増えてきているのだと思います。

去年、私は、一つ、びっくりしたことがありました。それは、立教大学の学生の中に、お葬式の研究というようなテーマで修士論文を書いた方がいるのですが、論文の最後に、いろいろなデータが載っていたのです。

その中のデータに、今、東京で、亡くなる時誰も手を合わせることなく、あの世に往く人の割合が10パーセントにのぼる、という数字がありました。つまり、いかなる意味でも、お葬式があがっていない人が10パーセントもいるということです。

お葬式ですから、特に大きなお葬式をあげなくてもいいわけで、場合によっては、知り合いが2、3人集まったり、親戚が2、3人集まったりしただけで、読経やお焼香をしなくても、ちよつと故人のことを考えながら手を合わせるだけでも立派なお葬式で、別に立派な祭壇を設けなくてもいいと私は思っています。

ところが、そういう意味でも、お葬式があがっていない。つまり、亡くなったから、ただ火葬場に運ばれて、なんらかの形で納骨されていく。そして、誰一人、お悔やみを言う人もいない。その割合が、全国で5パーセント、東京で10パーセントという数字があつて、ちよつと、びっくりしました。

この10パーセントが、まさか、将来、20パーセント、30パーセントに増えることはないと思いますが、それにしても、10人に1人が、誰も手を合わせることなく、あの世に往った、ということになると、この社会、大丈夫なのかという気には、やはり、なりません。

つまり、人間の死においてさえも人と人とのつながりがなく、バラバラになつてしまっているわけです。先ほど言ったとおり、すべての要素がバラバラに

なあって、つながりのない世界で人間同士のつながりもなくなっていく。こういう現実を前にして、今の農村というのは、人と人のつながりの、一つの可能性として捉えられているのではないかと思うのです。

では、そういう人たちは農村に何を求めているのか、ということになるわけですが、一つは、やはり、自然と共にある暮らしを求めているのだろうと思います。ただし、それは自然と共にある暮らしというよりも、むしろ自然に助けられた暮らしと言ったほうがいいかもしれません。

私のいる群馬県の上野村では、春になったときの安心感というのは、ものすごいものがあります。上野村は、昔は、ある意味で閉じられた村でしたから、冬の間はいろいろな保存食を作って、じっと春が来るのを待つという雰囲気个村でした。

今は、もちろん、村から外へ出て行くトンネルも整備され、村の中にスーパーもあるので、別に保存食を作らなくても東京と同じような暮らしをすることはできるのですが、不思議と、村にいると昔の村の暮らしから伝わってくる雰囲気が残っているせいか、やはり春になると本当に安心感があります。

その安心感を与えてくれるものは何かというと、一つの例は、山菜なのです。早いときは4月に入るころから、いっせいに山菜が出始めます。すると、もう何も困ることがない季節が来た、という気分になります。

考えてみると不思議なことで、山菜が出始めたぐらいで、もう困ることがないというような牧歌的な暮らしをしているわけではないのです。村の生活には車が必要不可欠ですし、電気も使っていますし、山菜ぐらいで、なぜ安心するのか、というのが現実ではあります。しかし、村の人たちにとって春が来たということは、村を支えてくれる自然が戻ってきた、ということなのです。

自然と共に生きるというのは、そういうことであって、自然に助けってもらう生き方が村の人たちにとっての一つの希望なのだろうという気がします。その意味で、福島原発事故では非常に広範な地域で人間が自然に助けってもらうことができなくなってしまった。そういう現実をつくってしまったという意味で、事故の収束という問題以外に自然の回復という大きな問題があると思います。

ただ、人間は自然に助けてもらおうと思ったら、いろいろなワザをもたなければなりません。たとえば、山菜ひとつとっても、どの山菜が食べられるのかということを知っていなければいけないし、また、山菜の中には、採って、おひたしにすれば、すぐ食べられるものもありますが、加工しなければ食べられない山菜もあります。

そのための知識も必要ですし、山の中へ行って木を切る技術とか、畑をつくる技術とか、そういうことも含めて、いろいろなワザをもってこそ村の暮らしが成り立っている。そして、そうしたワザも、今、都市部の人々が、手に

入れたいものに変わりつつある、という気がします。

同時に、村というのは共同体ですから、地域によって差はありますけれども、少なくとも東京などと比べると、はるかに人間的です。私は以前、東京で仕事が終わったあと、夜遅く一人で村に帰ることがありました。だいたい夜の1時とか2時に村へ着くのですが、車を動かしていると、車の音だけで村の人たちは私が帰ってきたことがわかるわけです。

すると、村の人が家から出てきて、「ご飯は食べてきたのか」とか「風呂はどうするんだ」とか「よかったら、うちの風呂に入っていかないか」とか、いろいろ声をかけてくるわけです。

今では、私が自分で料理を作るのが得意だということがわかってきたので、食事の声はかけなくてもいいらしいとわかっているのですが、そういう地域社会の雰囲気は依然として残っています。何か困ったことがあったら、ひと声かければ、みんなが考えて解決してくれるという共同体があるわけです。

ですから、自分たちがつくっている共同体というよりも、自分たちを支えてくれる共同体という感じで、気がついてみると、自然にも助けてもらい、共同体にも助けてもらっている。だからこそ、自分の側も、ときには人を助ける側に回るといえるか、支えるといえるか、そのために自分なりのワザをもたなければいけない、ということでもあると思います。

さらに、農村的世界にいと、時間というものがありようが違うということ強く感じます。たとえば、過去、現在、未来という言葉を使った場合、私たちは時間を一直線上にイメージすることが多いと思います。過去は終わったもの、現在は今、未来はこの先という感じで、都市部では、過去、現在、未来を一直線上に流れる時間として捉えていることが多いと思います。

ところが、農村的世界の過去、現在、未来というのは、そんな関係ではないことに気づかされます。なぜかというところ、農村では過去は消えるわけではなく、蓄積された厚みとして残っているからです。

たとえば、田畑ひとつとってみても、過去の人たちが頑張って耕し続けてくれたからこそ、今、有用な農地があるわけで、畑に行くたびに、この畑はもう300年も使ってきたんだとか、場所によっては1000年も使ってきたんだなどということを実感します。そういう過去の先人たちの営みがあってこそ自分の現在がある、ということ意識せざるを得ないわけです。

山に木を植える場合でも、今、山に木を植えたとしても、今の林業では、おおよそ100年ぐらいを目安にしていますから、自分が木を所有することはできないわけで、三世代から四世代に一回ぐらいの収穫という感じですか。ですから、それは自分の孫か曾孫の世代が伐採して収穫するので、そういうことを考えると、100年先の未来が自分の手の届くところにある、という感じがしま

す。

ですから、過去、現在、未来は、矢印のように一直線に過ぎ去っていく時間ではなく、自分の生きている、すぐ脇にある世界で、現在の中に過去もあれば未来もあるということをも、ごく自然に感じるわけです。

この問題は、多分、近代以前の人たちと近代以降の人たちの大きな違いだろうと思います。近代以降の人々は、過去、現在、未来という時間は一直線にながっているという時間観をもっています。

しかし、おそらく、近代以前の人々は、現在があるから過去がある、過去があるから現在がある、あるいは過去の営みがあるから現在の営みがあるというふうな、過去、現在、未来は経過的なものではなく、今という時間の中に一体的に詰まっている、そういう時間観をもっていたのではないかと思えます。

ですから、村の高齢者などは、80歳を過ぎる頃になると、「私もそろそろだよ」などと、よく言っていたものです。それは、死を拒否しようとするものでもないし、もちろん苦しみでもなく、むしろ「そろそろだよ」と言っていてニコニコ笑っている。

その高齢者たちにとって未来とは死後の世界であるわけですが、そこには絶えず死後の世界を感じながら今の自分の生き方を決めてきたという、現在と未来の関係がある。つまり、過去、現在、未来が一つのものとして見えているわけです。

それとは対照的に、現代の人々は、過去、現在、未来という一直線上で、絶えず未来に追いまくられているといえますか、未来が一つの恐怖として登場してくる。つまり、死というものが恐怖だし、その前の老後が不安だし、若い人の場合は、受験をどうしようとか、就職をどうしようとか、絶えず自分の未来に恐怖を感じながら追い立てられるという生き方をせざるを得ない。

それに対して、過去、現在、未来を統合した全く違う世界があることに気がついてくると、何か、そこに、いろいろなヒントがあるのではないかという気がしてきます。

それから、先ほど言ったとおり、村にはいろいろな神仏があります。あえて神仏と言うのは、村の信仰はもともと神仏習合であって、神と仏に明確に分けられていないからです。

私の住んでいる集落には、かつて小さな神社がありました。これは集落の人たちが勝手につくったような神社で、神主さんがいるわけでもありません。しかし、登記上は神社で、村の中の、より大きな神社がかつて統合管理していた小さな神社です。

この神社は不思議な形をしていて、小さなお堂があるのですが、そのお堂のつくりが、どう見ても神社とは思えないようなつくりなのです。しかも、庭に

は石仏がたくさんある。

実は、このあたりは江戸時代まで山岳信仰が盛んで、この神社は山岳信仰系の人たちがつくったお堂なのです。ですから、もともと神仏習合の場所で、神も祀るけれども仏も祀るという場所だったわけです。ところが、明治元年の神仏分離令によって、仏の領域が破棄され、神の領域だけが残されたわけです。

で、20年ほど前のことですが、当時の村の長老たちが、村の寄り合いで、神社という名称を返上したいという提案をしました。その理由は、ここは、もともと神社ではない、神仏習合の祈りの場だったのだ。それが神社だけになってしまったのは、かえすがえすも残念である。

そのいきさつを我々は子どもころから教わってきたから、よく知っているけれども、これからの若い世代には、そのいきさつがわからなくなってしまいう恐れがある。だから、自分たちが元気なうちに、神社という名称を破棄したい、という提案をしたのです。

神社でなくなるということは、形のうえでは神社本庁から脱退するということなのですが、村人たちの話し合いの結果、満場一致で神社本庁からの脱退が決定され、村人たちの意志が固いことから神社本庁も脱退を認めて、旧来のお堂に戻ったわけです。

こういうお堂のような場所は、地域の信仰の場所ではあったけれど、宗教ではないわけです。実は宗教という言葉も信仰という言葉も明治時代に入ってから翻訳語で、もともと日本語に宗教という言葉も信仰という言葉もなかったのです。

それは地域の人々の祈りや願いの場所であつたので、ときにはお寺や神社と関係があつた時期もあるけれども、それは宗教でも信仰でもなかった。それを明治時代になって信仰とか宗教という言葉で一括りにしたこと自体が間違이었다と私は思っています。

では、そういう場所で人々は何を祈っていたのか。それは、ときには自分や自分の家族が病気になったりすると、病気を治してくださいという祈りもあつたでしょうが、基本的には、この世界が永遠に続くようにという祈り方をしていたと思います。具体的には、自然が永遠であること、村が永遠であること、さらに自分たちの暮らしが永遠に続くことを祈っていたと思うのです。

そして、その祈りの対象が神さまであるのか仏さまであるのかさえ、実はどうでもいいといえますか、境内に観音さまや地藏さまの石仏があつたとしても、仏教や神道を超越した、自分たちの村の神さまや仏さまが祈りの対象になっていたわけです。一般的に、日本の伝統的社會には、そういう意識が根強くあつて、それが地域を結ぶ一つの役割を果たしてきたと思います。

その意味では、先ほどから言っているとおり、すべてのものが統一された世



界を私たちはなんらかの形で回復していかないと幸せになれないのではないかと、ということに気がついてきた。そのヒントが農村社会にあるのではないかと、気がします。

同時に、農村というのは、実は、結構、外の人とのつながりも、それなりにあった社会で、完全に閉じられた社会であったわけではありません。日本の高度成長が始まるころまでは、いろいろな人たちが、いろいろな形で村に入ってきていました。

たとえば、村の湯治場などがそうですが、昔は近在の農家の人たちや他村の人たちが、1週間とか10日とか、長い期間、湯治に来ていました。当時の話を聞いてみると、湯治に来る人たちは、家からフトンまで担いでやってくるという感じなのですが、すると湯治場のあたりに市が立つことがあったようです。湯治に来た人たちが、いろいろな物を並べると、村の人たちも家から持ってきたものを並べる。そこで、一種の物々交換が行われるわけです。

これは決して商売でやっているわけではなくて、そこで新しい作物の種を交換したり、新しい農機具などについて教え合ったりするという、情報交換の場にもなっていたのです。ですから、湯治というのは、たんに風呂に入るために来ているだけではなく、村と外の世界との交流の場でもあったし、自分たちの生活を支えていく場でもあったわけですから。

それが、高度成長期に入ったあたりから、なくなってしまった。観光客が車で大勢来ても、村人と交流する場がなくなってしまった。ですから、そういう外部の人たちとのつながりをどうしていくかということは、これからの村の課題の一つだと思います。

結局、日本の伝統的な社会というのは、自然と人間が結び合った社会であって、自然も社会の構成員だったのですね。しかも、その人間の中には、生きている人間だけではなく死者も含むというのが日本の農村社会の特徴です。

死者は消えてしまったわけではなくて、絶えず自分たちの周りにいる。だから、自然のことも考えるし、死者のことも考える。それは、先ほど言った、過去と現在の関係であって、その意味で死者は消えない、という捉え方をしていたということなんです。

ですから、東日本大震災などでも、死者との関係をどうつくり直すかということ、被災された方にとっては大きな問題で、そのことについて自分なりの納得ができないと、いくら頭で考えても気持ちがついていかない。

復興に向けて歩き出そうといっても、なかなか体が動かないということがあって、やはり生者と死者がどういいう関係をもちながら生きていくか。この理解の仕方が、これからの社会の一つの目標になるということに、今回、新たに気がついた、ということでもあると思います。

これから上野村をどんなふうにつくっていくかということですが、上野村の方針に関して言えば、100パーセント、伝統回帰、徹底的に伝統に戻るということです。ただ、伝統に戻るといっても、昔と同じ形に戻そうとすると、かえって伝統に戻れないということがあります。

ですから、伝統に戻るために、むしろ新しいものをどんどん取り入れるというやり方を考えています。たとえば、昔はマキをストーブで焚いて暮らしていた。上野村には森や林がたくさんありますから、そこから伐採された木の枝や幹をマキとして使う。そのプロセスでは、コンピューターなども使いながら新しい暖房器具や燃料も作っていく。

その背景にあるのは、自分たちの地域のエネルギーで生きていこうという考え方です。かつては地域のエネルギーだけで、みんなが生きていたじゃないか。それが上野村の伝統なのだ。だったら、そこに戻ろうよと。

ただし、戻ろうとしたときに昔と同じ生活に戻すわけにはいきませんから、新しい技術も使うし、新しいやり方も取り入れる。上野村独自に発電もやろうと計画しています。

考えてみれば、我々は、高度成長以後、国家とか世界経済とか大きなものに振り回され続けてきたと思います。そのために、一人ひとりの人間に存在感がなくなってしまった。

こういう時代から、もっと、みんなが結び合いながら、存在感をもてるような時代に戻ろう。そのためには新しい手法も取り入れていかなければならない。今、農村から想像していく未来とは、こういうことだろうと思います。

テレビニュースなどを見ると、日本経済を活性化するために新しい産業の育成が必要だなどと言っていますが、それは考え違いだと私は思っています。そんなことを求めない人たちが、むしろ増え始めているのです。そして、その人たちが本当に求めているのは伝統回帰だと、はっきり断言してかまわないと思います。

その伝統回帰をするためには、新しいこともどんどんやらなければならぬ。農村を伝統的な活力ある村にしていこうとすれば、新しい人にもどんどん入ってきてもらわなければいけない。そういうことをやりながら農村的な伝統に戻っていく。その戻り方を提示していくことが、これからの農村の一つの大きな役割ではないかと思っています。ご清聴ありがとうございました。